

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	長岡 慶
論文題目	現代ヒマラヤ世界におけるチベット医学の制度化と病気治療 —インド北東部タワンの暮らしと病いの民族誌—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、インド北東部タワンを事例に、チベット医学の制度化が進展する現代ヒマラヤ地域において、どのように病いの治療が実践されているのかを明らかにすることを目的とする。第 1 部第 1 章で本論文の理論的位置づけを示す。従来の伝統医療 (非生物医療) に関する研究は、近代化やグローバル化のなかで対象領域を拡大してきた生物医療への吸収や組み込み、あるいはナショナリズム・イデオロギーの影響下での知識や制度の再構築など、伝統と近代の融合や混交を論じてきた。チベット医学に関する研究も同様の傾向にあり、とくにチベット医学の制度化に注目し近代性を含んだチベット性 (Tibetan-ness) の構築とアイデンティティとの関わりが論じられてきた。しかし、一方で日常生活における実際のアムチ (チベット医) と人々の具体的な相互交渉や、一般の人々の視点、病いと治療の社会的文脈については十分に論じられてこなかった。そこで本論文は、メアリー・プラットのコンタクト・ゾーンの議論を参照しつつ、チベット医学と現地の人々が邂逅し交渉する社会空間に視点を移し、日常の文脈における病いと治療の実践に注目した。さらに、アネマリー・モルによる実行 (enact) の議論を参照しつつ、病いを認識論ではなく実行されるものとしてとらえ、従来のチベット医学の制度化の議論には含まれてこなかった病いに対する多様な実践や資源を含めて、より包括的にとらえることを目的とする。第 2 章は調査地であるタワンの地理的概要や歴史的背景を示す。第 II 部では、制度的医療としてのチベット医学の展開と診療の実践について論じる。第 3 章でインドにおけるチベット医学組織の拡大や合法化の経緯、薬の標準化について述べ、制度化されたチベット医学とタワンの人々が出会う過程を論じ、薬草供給や薬草栽培を通じた組織のアムチとタワンの人々との協力関係を明らかにしている。第 4 章では、タワンの診療所におけるチベット医学の実践について、病気の診断や施術だけでなく、処方箋や薬、贈り物を介したアムチ、患者、スタッフの相互交渉を明らかにする。第 III 部ではタワンにおける病いとそれに対応する複数の身体のありかたを論じる。第 5 章では、ナツァと呼ばれる病気に対応するアムチ、子どもの病気の治療者、真言吹き治療者の実践の違いを述べる。第 6 章では、神降ろしの儀礼や悪霊祓いにおける憑依の実践を取り上げる。神の憑依や悪霊の憑依の文脈における他者や異物の器としての身体のありかたを論じ、身体がよりよい来世への財となる一方で、絶えず悪霊によって奪われうる不確かな状況に位置づけられていることを明らかにする。第 7 章では、神霊ルーの祟りによって</p>			

もたらされる病いに注目する。ルーが土地の変化や身体の変化と関連づけられることによって繁栄や衰退が予期され、ルーを媒介に土地と人々の関係が再編されつつある状況を明らかにしている。第IV部では、チベット薬の標準化とは異なる文脈にある薬と身体との相互作用について論じる。第8章で、タウンの人々が利用する宗教薬によって媒介される僧院や身近な他者との社会関係を論じる。第9章は、毒盛りによってもたされたとされる病いに注目し、毒盛りの物語と民間薬の関わりを論じる。タウンにおいて目に見えない不確かな毒が病いの経験において重要な要素となっていることを示し、民間薬によって媒介される毒盛りの物語が毒やドーマ（毒盛り女）を実体化させ、さらに様々な人や場所によって物語が絶えず読み替えられていくことを論じている。